

# ●モノグラフ小学生ナウ



友だちとしてのペット



vol.3-5

©1983(株)福武書店 教官研究所/加藤智雄・賀川雅子・田中美幸  
東京学芸大学助教授 深谷和子・千葉大学研究生 庄 健二

## 目次

特集／子どもとペット..... 2

### 調査レポート／友だちとしてのペット

要 約..... 6

1. ペットをどのくらい飼っているか..... 8

- サンプルの特徴 ..... 9
- ペットを飼っているか ..... 10
- 自分が世話しているペット ..... 13

2. 子どもが飼いたいもの..... 15

- どうしても飼いたいもの ..... 15
- 家の人びととペット ..... 18

3. 友だちとしてのペット..... 22

- 野山へ捕りに出かけた経験 ..... 22
- 生態を見た経験 ..... 24
- ペットのイメージ ..... 26

まとめに代えて..... 31

シリーズ／子ども考現学

子どもの姿・昔と今(15) 教科書..... 32

資料1・調査票見本..... 37

資料2・学年・性別集計表..... 44

特集

# 子どもとペット

東京学芸大学助教授 深谷和子



## 3つのケース

小さな子どもたちが、ペットを好むことはよく知られているが、その対象は、さまざまである。昆虫や小動物、小鳥や魚など、生命のある小さな仲間を求めることもあるし、また生命のないもの——例えば、赤ん坊の頃使ったタオルケットや毛布、ピロードやしゅすの枕のすべすべ、つるつる、ふわふわした感覚をこよなく愛し、時には、これに母親以上の愛着を示すこともある。さらに、考えてみると、指しゃぶりや爪かみ、オナニーなど、体の一部をいじるくせも、これにつながった

行為だし、もっと一般的な形として、ぬいぐるみや人形などのオモチャ類を好むのも、同じメカニズムからなのだろう。

ふつう子どもたちが、心身ともに健康に育っていても、こうしたペット愛好は、いろいろな形で子どもの中にあるものだが、子どもの心の中にハッピーでない部分や、なんらかの心理的なひずみがある場合には、これらの態度は一層はっきりしたものになる。

臨床心理学で“ペット愛好”や“体の一部をいじるくせ”が注目されるのは、それらの行為が度の過ぎたものである場合に、これを一種の神経症的な症状とみなした方がよいことからくるのだろう。

例えば、母親が大変に厳しいしつけをしていたA児の場合、彼は5歳になっても、赤ん坊の時に使っていたタオルケットを離さなかった。そのタオルケットを、24時間彼が離さず、むろん眠る時も、それに包まれないと寝つかないで、それはいつかぼろぼろにすり切れ、異臭を放ってしまっていた。母親は、これを何度も取りあげて、ゴミ箱に捨てたのだが、その都度彼は半狂乱で泣きわめき、目をすえてしまうので、またゴミ箱に捨に行かなければならなかった。彼は、母親との間の緊張した関係から受ける圧迫を、このタオルケットにさわり、匂いをかぎ、これにくるまって寝ることで、解消していたのである。だからこのタオルケットというペットは、A児には母親以上の母親の役割を果たしていたに違いない。

また4歳のB児は、大きな紙袋に、折紙や積木、小さいおもちゃや瓶のふた、広告の紙や人形などをいっぱい詰めて、これをどこへでも持って歩いた。医者でもレストランでも、友人の家でも、幼稚園でも、とにかくこれがないと彼は、どこへも出かけようとしないのである。この場合は彼が、家の外で出会う、たくさんの人びととの関係から生じる不安に、この自分のお宝といっしょにすることで、辛うじて耐えていたのだと、みなしてよいだろう。

さらに4歳のC子には、指しゃぶりのくせがあった。彼女の右手の親指はいつもまっ赤にはれあがり、時には、それが膿んだりもした。彼女が指しゃぶりをするのは、退屈な時、眠い時、テレビを見ている時、それと母親に叱られたり、友だちにいじめられたりした時だった。指しゃぶりが始まると、彼女はひたすらそれに専念し、外界の出来事は、まるで眼中にないかのようである。指しゃぶりに熱が入って、チュウチュウという異様な音をたてる。母親がそのくせを嫌がって叱ると、その時は指を離すが、またすぐ始まる。このく

せは、赤ん坊時代から始まった。母親はきちようめんで掃除好きの女性で、C子をベビーベッドの中に入れてまま、次の授乳時間まで放置しておくことが多かった。C子がおとなしいのを幸いに、母親は家中をすみずみまでこまめに掃除し、磨きあげたのである。一人放っておかれたC子が、やがて見出したのは、自分の指を吸って、退屈をまぎらわすことだった。

## 子どもにとってのペット

臨床心理学者が問題としてとりあげるような、ペットをめぐる3つのケースを紹介してみた。これら3人の子どもたちに共通するのは、いずれも子どもたちの心に、どこかアンハッピーな部分があり、それから引き起こされる不安や緊張を、さまざまな形のペットとかかわることで、まぎらわそうとしていたことである。

しかし、これらのケースは、たまたまペットの対象や、それへの愛好ぶりが、やや逸脱していたので異常な感じを受けるが、そのメカニズムはふつうの子どもたちにも共通する



部分を持っている。

考えてみると、子どもとは、おとなたちが考えるより、はるかにストレスの多い、アンハッピーな存在ではなかろうか。

彼らは、自分の力だけでは何ひとつこの世界を自由にできない。夕食にコロッケを食べたければ、おとなはそれを買ってくるか、作るかすればよい。ところが子どもはコロッケを食べるためには、母親にお願いしなければならない。そして子どものお願いというのは、しばしばおとなたちによって拒否されがちなものなのである。

また彼らは車を運転したいと思う。しかし子どもには運転免許が与えられないから、例え家に車があっても、それを運転することはできない。また彼らは、野球の試合を見たいと思う。彼らは当日の巨人—阪神戦が後楽園で行われることを知ってはいても、どうすればそこまで行くことができるか知らない。むろんお金も持っていないし、日頃から試合を見に行く許可などは、めったなことではおり

ないのである。

そう考えると、子どもは自分の要求をおとなによってみたしてもらうか、または成長する日まで要求の充足をがまんするか、またはきっぱりと断念してしまうか、いずれにせよ、極めて行動の制約された不自由な存在だということに気づく。しかも子どもの周囲は、知らない人間や環境など、正体がわからず不安を引き起こすような対象でみている。子どもの安全感は、常におびやかされている。

こうした状況の下で、子どもがなんらかの形で緊張を解消し、精神的なバランスを回復させようとするのは、当然のことであろう。それが自分と同じ、小さくて、自分が支配できる仲間たち(生きもののペット)を求め、または母親に代わって、精神的な安定感を与えてくれるような、数々のくせ(もののペット)をくり返す行為となって現れてくるのだと考えるのが妥当だろう。

だから小さい子どもたちの仲間の一部として、なんらかの意味で、ペットが必要である。それも、できたらものへの固執を含むような、くせのくり返しではなく、生きて動く、かわいい動物や虫や小鳥たちとの健康な触れ合いが望まれるところだろう。自分が支配できる小さい世界の中の小さな家来であり仲間であるペットたち。それらのペットとの触れ合いの中で、子どもは自然に、ストレスの解消をしていく。パーソナリティーの健康な発達のためにも、子どもはこうした小さな仲間を持ち、仲間とのかかわりの中で安定し、心のバランスを保っていくことが必要なのである。

## 学校にもっとペットを

しかし、現代の子どもたちの暮らしの中からは、こうした小さな生きものたちとの接触の機会が減る一方である。子どもたちは、人の仲間たちとの触れ合いの機会を失ったばかりでなく、ペットとの触れ合いの機会をも、





大きく失いつつあるのが現状である。

おとなたちが、団地に住み、また庭付きの家に住むと、まず緑を育て、緑を身近に置こうとする。団地のベランダが植木鉢であふれ、下町の細い路地に、木箱に植えた植物がずらりと並んでいる風景は、おとなたちでさえもが、生きものの中にいかに心をなぐさめてくれる対象を求め、精神のバランスを保とうとするかの良い例であろう。まして成長の途上にあり、ストレスに耐えていけるだけの力を持っていない、子どもたちの場合には、なんらかの形でこうしたペットとの触れ合いを確保してやることの大切さは、言うまでもない。

かつて筆者がカリフォルニアのオープンスクールを訪ねた折のこと。とある小学校の図書室（正確には図書をたくさん置いてあるコーナー）の中央に、体長70センチはあろうと思われるイグアナが、ガラス箱の中に入れられ、飼われていた。イグアナは、ほとんど動かず、たまに片目を開けて、鋭い視線をわれわれに送ってよこす、といった感じで横たわっていた。

ところが3年後、筆者がまた機会あって同じ小学校を訪問してみたら、例のイグアナが

やはりものうい様子で、ガラス箱に横たわっているのではないか。イグアナが3年もの間、自分のために待っていてくれたような感慨が、湧き上がり、筆者は心がゆさぶられるのを感じた。

考えてみると、小学校の学級でよく金魚や小鳥を飼っているのは、やはり子どもたちに、少しでも多く、ペットを与えたいと願ってのおとなたちの配慮だろう。また校庭の隅で、ウサギやニワトリやアヒルなどを飼っている光景も、まさにこうした配慮からのものであろう。

子どもたちの住む生活環境が、悪化する一方の今日、家庭や近隣でペットを飼うことは、一層難しくなりつつある。とすれば学校で、金魚や小鳥などの飼いやすいペットを飼うことはむろん、イグアナほどではなくてももっと珍しく、大型で、ふつうでは飼うのが困難なペットたちを、全校で飼育することが望まれるところである。当番を決めてえさを持ち寄り、世話(掃除)をし、運動させ、一緒に遊ぶ。そうした試みをもっと学校内に一つの教育活動として、積極的にとり入れられることが望まれる。

# 調査レポート／友だちとしてのペット

東京学芸大学助教授 深谷 和子

千葉大学 研究生 庄 健二

## 要 約

### ① 犬と金魚に人気



現在子どもたちの家で飼われているペットは、犬が28%、金魚が28%。他は10%を割ってしまう。ペットを飼っている家は、わりと少ないことがわかる。(図5)

### ② カブトムシは8割

カブトムシ8割、ザリガニやカニ7割、チョウ・オタマジャクシ6割、カマキリ・ホタル・コオロギ・スズムシ5割など、過去に虫や水辺の生きものを飼育した経験は、予想外に多く持っている。特に男の子にその経験が多い。(図7・図8)



### ③ 他人まかせ



ペットを飼っている場合でも、その世話を子ども本人がしている場合は、極めて少ない。例えば、金魚で16%、犬で13%、他は大きく10%を割ってしまう。(図9)

#### ④ 飼ってはいけません

子どもたちの半数は、かつて犬やネコやハムスターなどを飼ってほしいと親にねだって、拒否された経験を持つ。(図12)



#### ⑤ 少ない経験

子どもたちだけで、野山へ虫や水辺の生きものを捕りに出かけた経験は、思ったより少ない。ドジョウ・ヤドカリで9割、タニシ・カエル・キリギリスで8割、メダカ・フナ・オタマジャクシ・ホタルで7割の子どもが、ほとんどそうした経験を持っていない。(図19・図20)



#### ⑥ 悲しみ



飼っていたペットが死んで、悲しい思いをしたことのある子どもは、男子で29%、女子で17%。愛情をこめて、ペットを飼うことが少なくなっているのかもしれない。(図24)

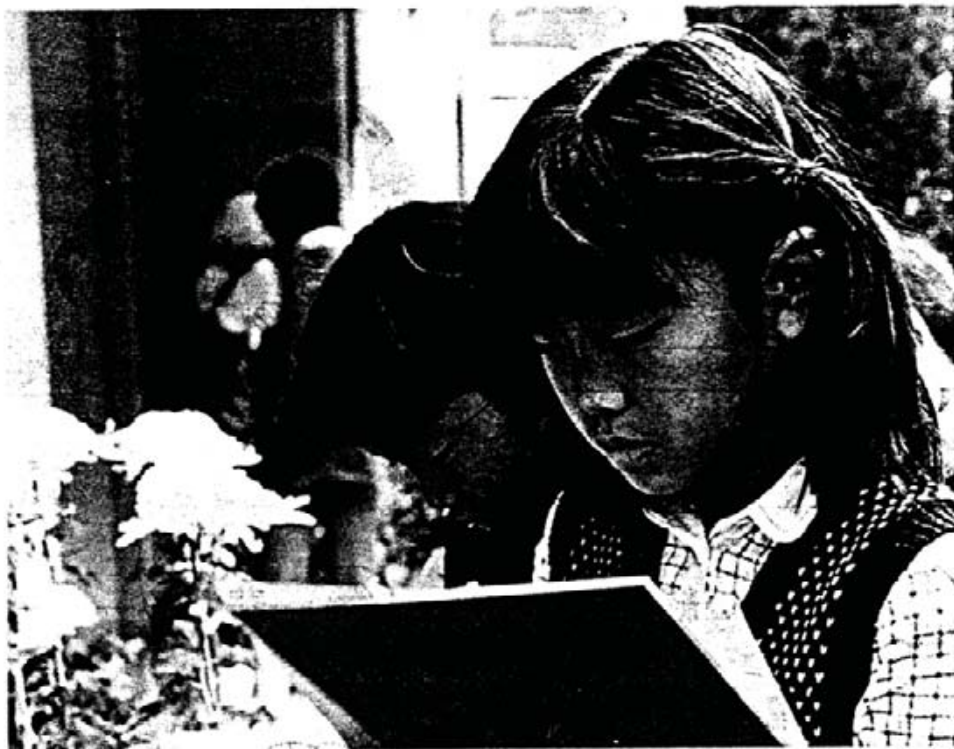
サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	172	144	316
5年	319	313	632
6年	184	158	342
計	675	615	1,290

調査概要

対象●大阪府・奈良県の小学4・5・6年生計1,290名  
 時期●昭和57年11～12月  
 方法●学校通しによる質問紙調査

## 1. ペットをどのくらい飼っているか



友だちは子どもの成長にとって、なくてはならない大切な存在である。ただし友だちといっても、人間の友だちだけを考えると不足だろう。子どもの身近にいる動物や虫たちなどの小さい生きものもまた、人間の友だちに負けずおとらず、大切な仲間だと考えてよいだろう。子どもの成長は、そうした数々の仲間たちとの心の通い合い、触れ合いの中で、十分になしとげられるのだと言ってよいと思われる。

しかし、最近の子どもたちの生活をとりまく諸条件が、必ずしも人間の友だちとの接触を十分に生み出さない方向に変化してきていることは、度々指摘される場所である。出生率の低下による仲間の数の減少。都市化に伴う遊び場の不足。おけいごとや学習塾通いによる遊び時間の不足。加えてテレビという、子どもたちにとって極めて身近で接触しやすい友人の出現。いずれをとっても、人間の仲間との接触が、質量ともに貧弱になる条件ばかりが揃ってきている。

では、もう一方の大切な友だち。つまり虫や動物など小さい生きものとの接触の状況はどうなっているのだろうか。本レポートは、子どもにとっての友だちという観点から、いわゆるペットとの接触状況を明らかにしてみようとするものである。



## サンプルの特徴

本調査の対象は、地方都市に住む8つの小学校4年から6年までの子ども1290名である。したがって図1に示したように、現代としては比較的自然的に恵まれた環境下に生活する子どもが多く、5割強の子どもたちが、家から歩いて10分以内に虫や鳥などのたくさんいる場所を持っており、図2に示したように、庭つきの家に住む子どもも8割にのぼる。また図3

に示したように、遊びに熱中して家に帰るのが「しょっちゅう」「わりと」遅くなると答えている子どもも、男子で60%女子で44%もある。

しかし友だちとの関係は今ひとつという感じで、巻末の集計表に掲げたように、友だちの数は「とても多い方」27%、「わりと多い方」30%と数においては、ほぼ十分のようだが、では「どんな悩みでも打ち明けられるような

図1・家のまわりに虫や鳥がいる場所があるか

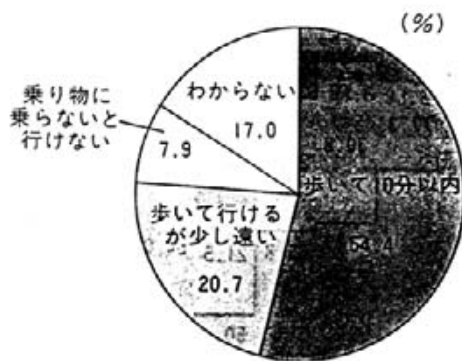


図2・あなたの家

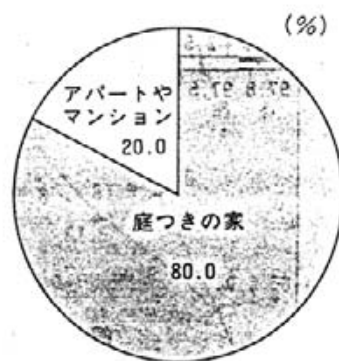


図3・帰宅が遅くなることもあるか

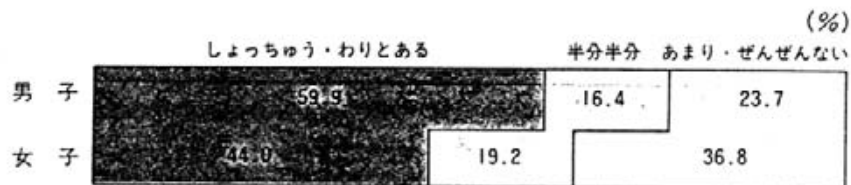
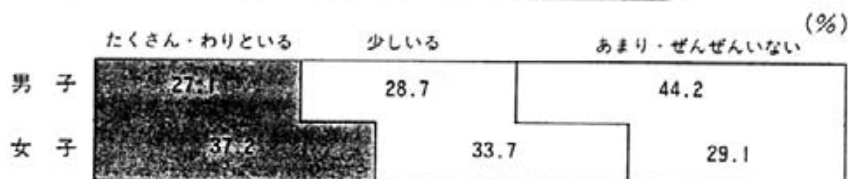


図4・仲よしの友だちがいるか



仲よしの友人」となると、図4に掲げたように「たくさん」「わりと」いるが男子27%女子37%。逆に「あまり」「ぜんぜん」いないが44%と

29%となっていて、その関係には、あまり十分でないものを感じさせる数字が並んでいる。

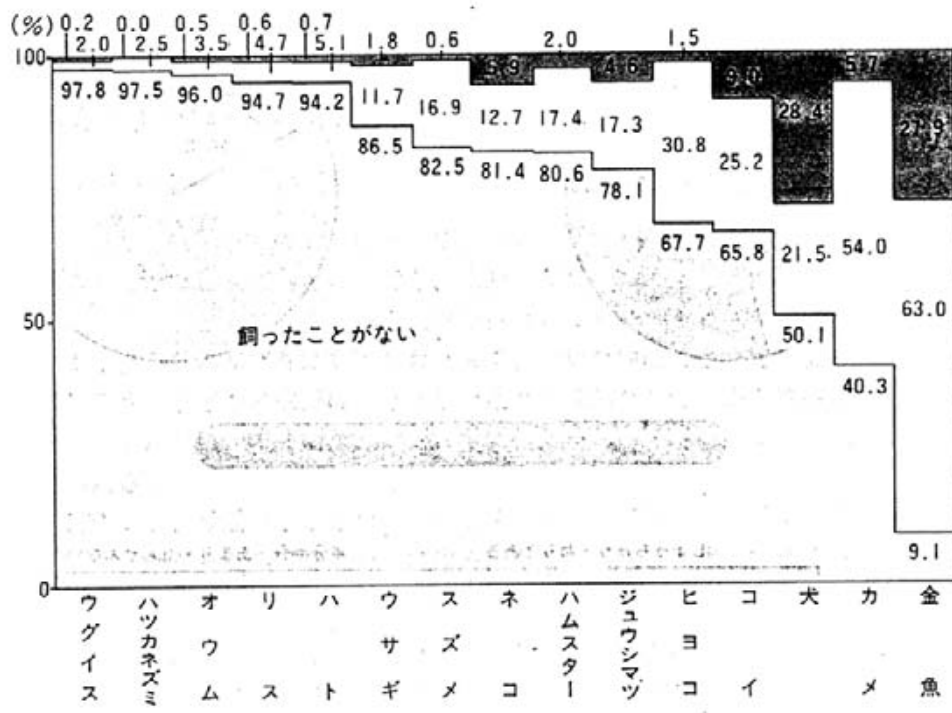
## ペットを飼っているか

まずはじめに、子どもたちが現在、また過去において、どのくらいペットを飼ったことがあるかを見よう。図5と図7は、30種類のペットを、主としてお金を出して買わなければ入手できないような小動物や鳥類と、自然

にいる虫や水辺の小動物とに分け、「現在飼っている」「過去に飼ったことがある」「全く飼ったことがない」に分けて、図示したものである。

まず図5だが、現在飼っているのは、犬の

図5・生きものを飼っているか(小動物や鳥)



注) ■ 今飼っている  
 □ 前には飼っていたが、今は飼っていない  
 □ 飼ったことがない

28%、金魚の28%ぐらいのもので、あとのペットの飼育率はすべて10%を割っている。過去に飼った経験を合わせても、金魚・カメ・犬以外はすべて飼った経験が50%を割っている。各家庭でこうしたペットを飼うことが、いかに少ないか、または困難になっているかを示す数字であろう。30年前、50年前の子どもたちなら、ほとんどたいていは一度ぐらいの経験を持っていたのではないだろうか。

図6は、これの男女別だが、ほとんど性差なく体験を持っていないこともわかる。

次に図7は、虫や水辺の小動物である。図

5と比較して明らかなのは、全体としては鳥や小動物類よりは、飼った経験を持っていることで、現在こそどれもほぼ5%以下の飼育率だが、かつて飼った経験を持っている子どもは、かなり多い。特にカブトムシで8割、ザリガニやカニ7割、チョウ・オタマジャクシが6割、カマキリ・ホタル・コオロギ・スズムシが5割と、虫に親しんだことのある子どもは、現代でも意外に多いことがわかる。

また図8は、飼育経験と性別だが、すべてのペットにおいて、男子の方が女子より多い飼育経験を持っている。なぜなのだろうか。

図6・生きものを飼っているか(小動物や鳥)×性別

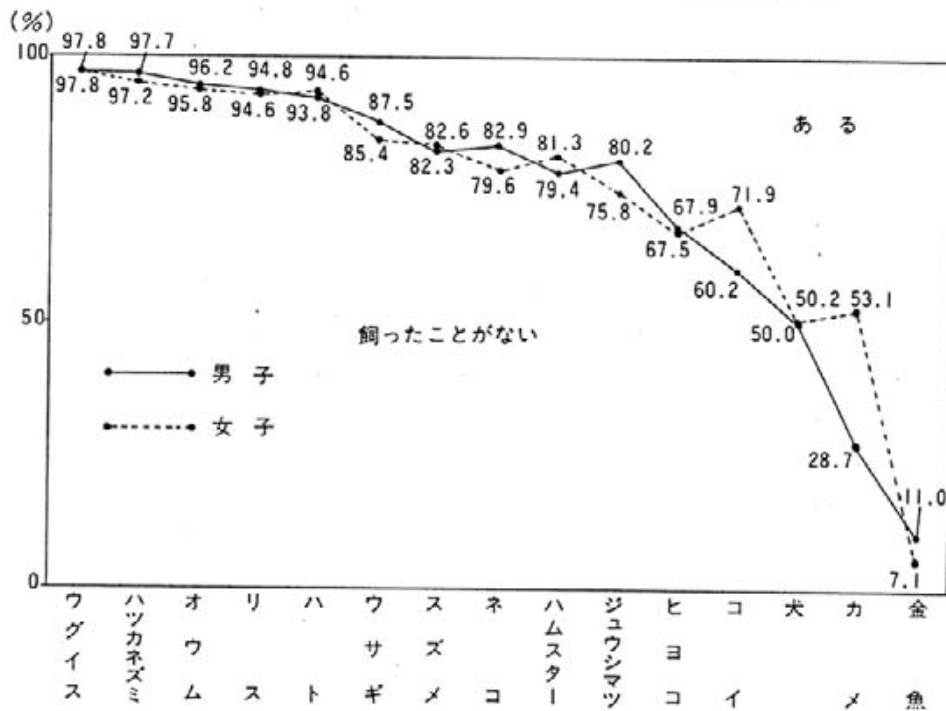


図7・生きものを飼っているか(虫類)

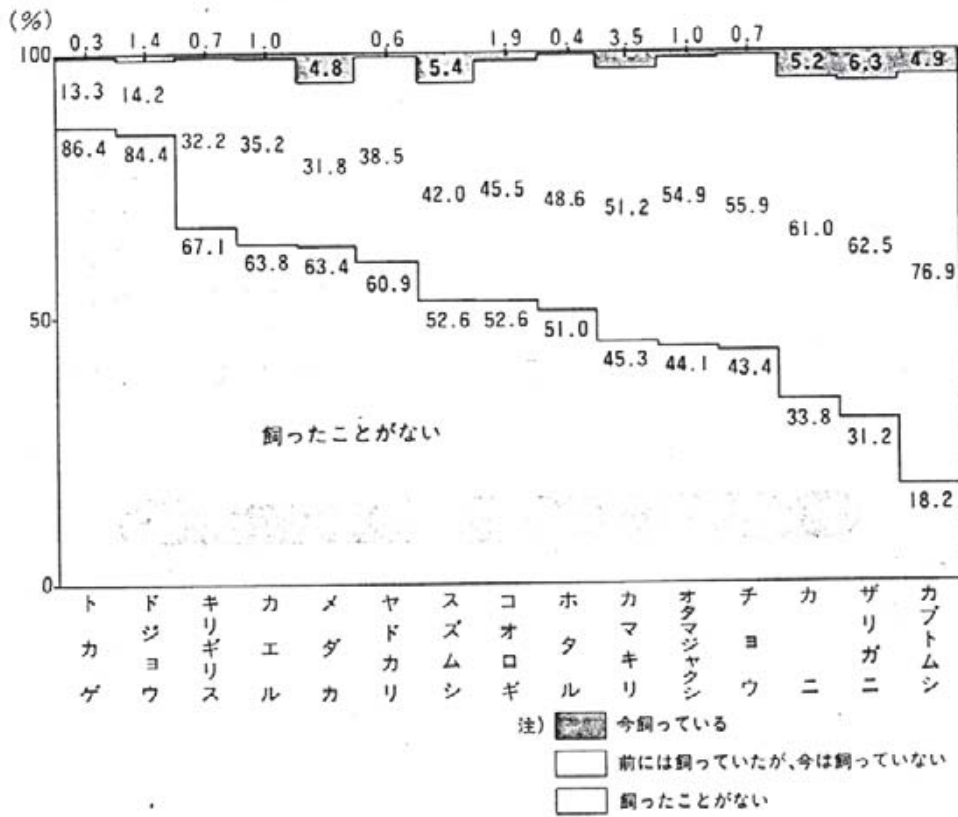
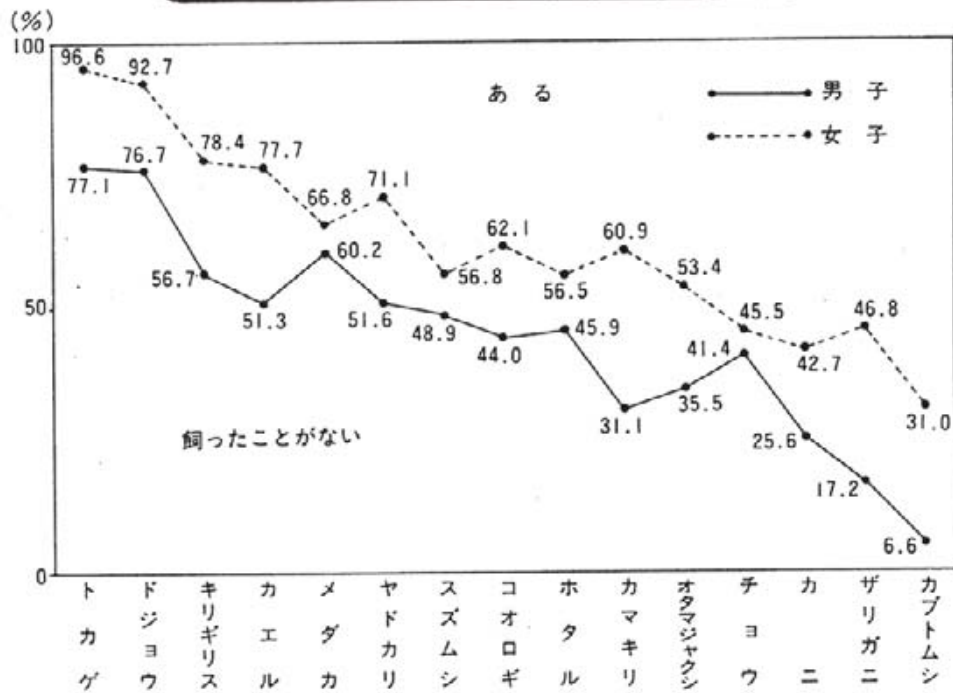


図8・生きものを飼っているか(虫類)×性別



## 自分が世話しているペット

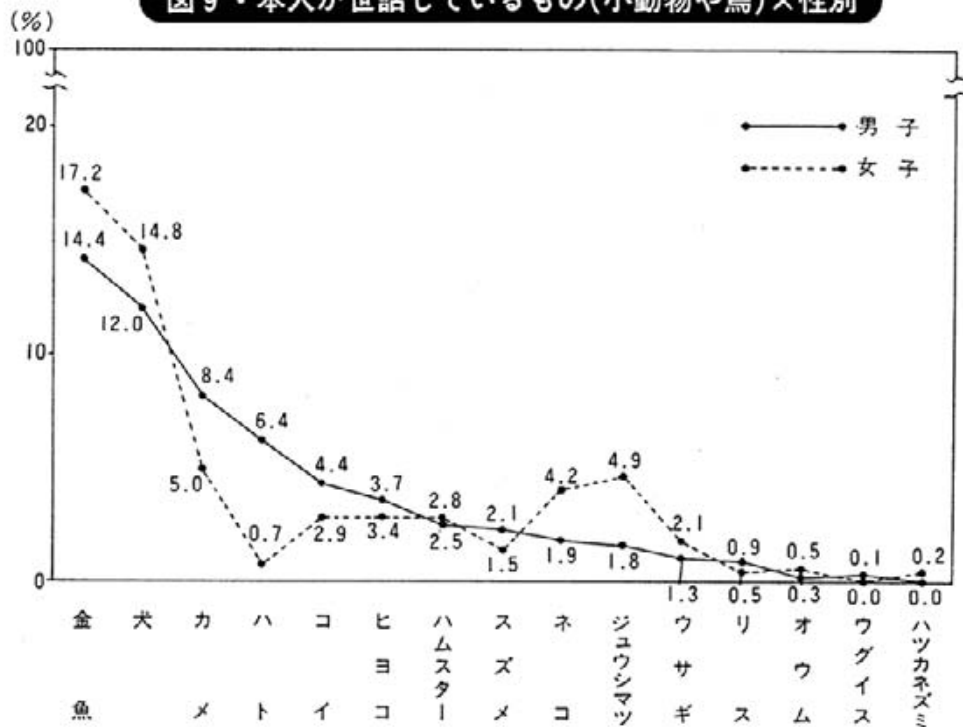
しかしこれらのペットの中には、本人が飼っているというより、家庭で飼っていて、本人はただその鑑賞者にすぎない場合や、本人が言い出して飼ってはみたものの、途中でその世話を放棄してしまって、家の人が世話しているものなど、いろいろだろう。そこで、図9・図10は、今飼っているペットの中で本人が実際に世話しているものを尋ねた結果である。

まず全体としては、本人が世話していると答えられているものの数が、極めて少ないのが、特徴的である。図9で、いちばんよく世話されている金魚ですら、男子の14%女子の17%が世話しているだけで、8割以上は家の人

が世話している勘定になる。2位の犬も、男子で12%女子で15%、3位以下は10%を大きく割ってしまう。子どもはあきっぱい生きもの

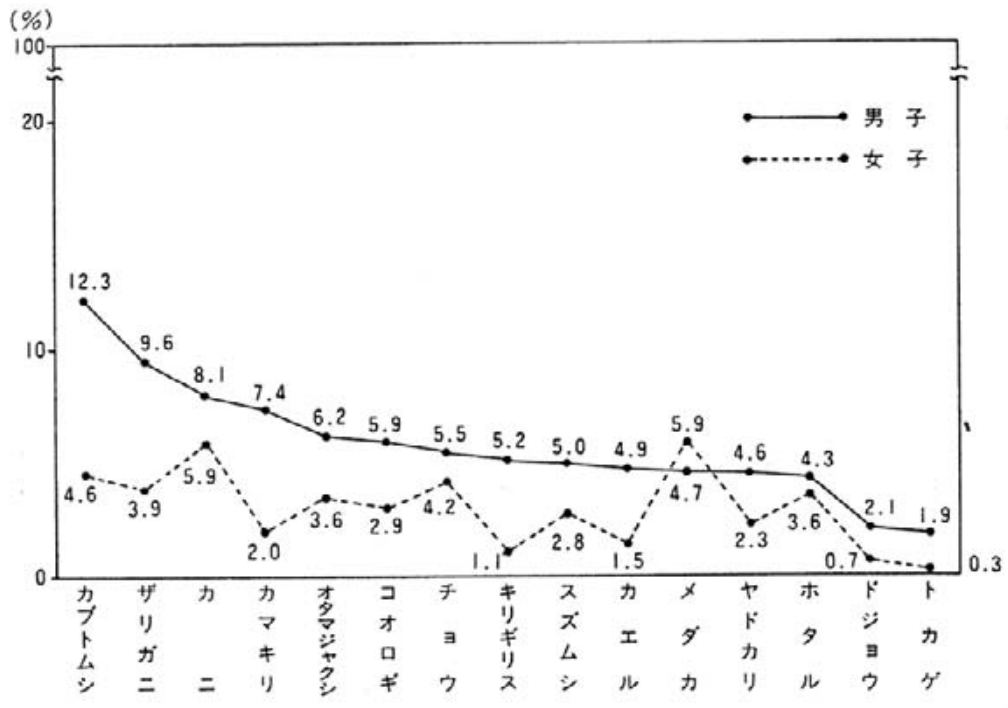
だとは言うものの、これではあまりにひどいという気もする。性別では、女子より男子がよく世話しているのは、カメ・ハト・コイ。逆に女子の方がよく世話しているのは、金魚・犬・ネコ・ジュウシマツであることもわかる。性別によるペットの好みの違いだろう。次に図10の虫類では、やはり全体としての世話率は低いものの、それでも女子より男子の方が、ほとんどのペットをよく世話していることがわかる。男子の虫類好きは図8で見た通りだが、好きなだけに名目だけの飼い主ではなく、実際に世話している子どもも、多少はいるということなのだろう。

図9・本人が世話しているもの(小動物や鳥)×性別



注)「世話をしている」割合

図10・本人が世話しているもの(虫類)×性別



注)「世話をしている」割合

## 2. 子どもが飼いたいもの



### どうしても飼いたいもの

子どもたちがペットを飼った経験は、予想外に少ないことを見てきた。では子どもたちは、ペットを飼いたがっていないのだろうか。

まず図11は、子どもたちに「あなたは動物が好きですか」と尋ねた結果である。全体としては、「とても好き」と答える子どもが多く、「わりと好き」を合わせると9割近くの子どもが、動物好きだと答えている。動物好きなら、自分の身近に、ペットとして小動物を飼いたいと思っているに違いない。そのことに関連して尋ねたのが図12で、「これまでに、飼いたくて両親にお願いしたのに、駄目と言われて飼えなかったものがありますか」と尋ねた結果である。たいていのおとななら、こうした悲しい体験を、何度も子ども時代に経験しているのではないだろうか。今の子どもも、

昔の子ども以上にこうした体験を、狭い住居環境のゆえにしばしば重ねていると思われる。

ここで尋ねたのは、小動物を中心にした14種類であるが、2割から5割ぐらいの割合で、どれも飼育を拒否されて、断念した経験を持っており、特に女子がペットを飼いたがっている様子がわかる。親が「飼っては駄目」と言ったのには、種々の事情があるのだろうが、ちよっぴりかわいそうな気もする。

しかしこうした子どもたちのペットへの切望は、果たして本物なのだろうか。その点をさらに押して見たのが、図13である。これはペットを「自分1人で全部世話してもいいから飼いたい」と切望するのか、それとも「親が世話してくれるのなら飼いたい」のか、それとも「飼いたくない」かを見ようとしたものであ

る。

まず全体としては、図11で見たように動物好きだと答える子どもが多い割には、「飼いたくない」と答える子どもの多い点である。いちばんほしがられている犬でも17%、リスで36%、ハムスターで42%、金魚で44%もの子どもが、はっきり「飼いたくない」と答え、ハツカネズミやニワトリに至っては、8割近くが「飼いたくない」と答えているのが目をひく。

また「飼いたい」と答えている子どもの中でも3分の1から半分は、「親が世話してくれるのなら」と答え、自分が全部世話をするからと切望している子どもの割合は、意外に低い。いちばん望まれている犬ですら、54%、リスで39%、ネコで19%、ニワトリではわず

か8%でしかない。子どもたちの動物好きの答えにも、ちょっと首をかしげなくなる結果である。

図14は性別との関連だが、自分で全部世話してもと切望するのは、やはり男子よりも女子に多い。これは女子の方に動物好きと答えた子どもの割合が多く(図11)、駄目と言われて断念した子どもの割合が多い(図12)、とも一致する。ただし先(図6・図8)に見たように、小動物の飼育経験に差がなく、虫類では男子の方に経験が多い結果とは、やや矛盾している。女子はペット好きと言っても、本当の生きもの好きというのとは、違うのかもしれない。このことは本人が世話しているもの(図9・図10)にも表れている。

図11・動物好きか

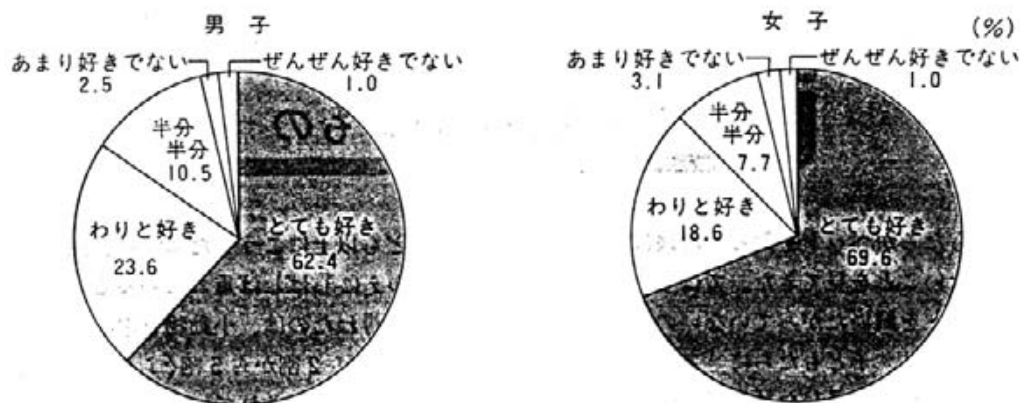
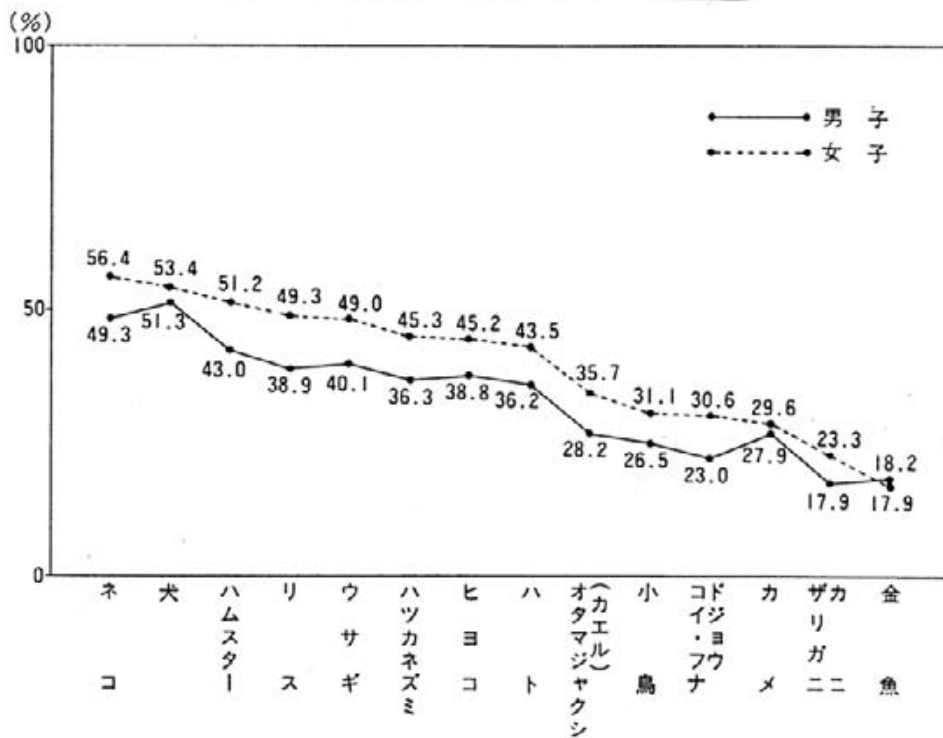


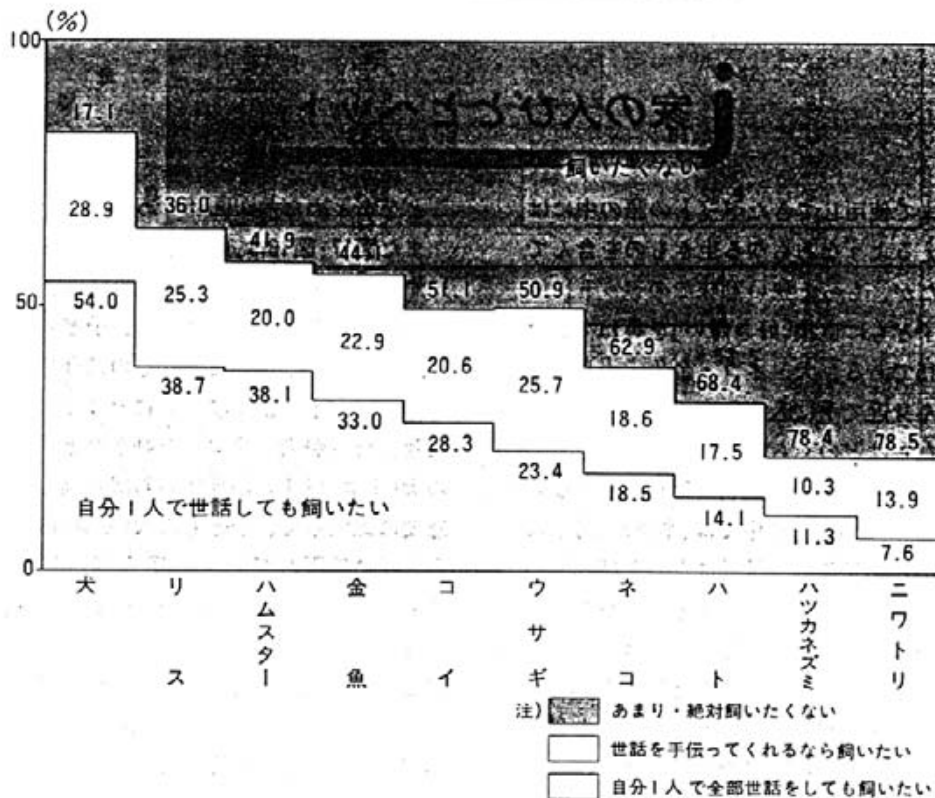


図12・飼えなかった生きもの×性別



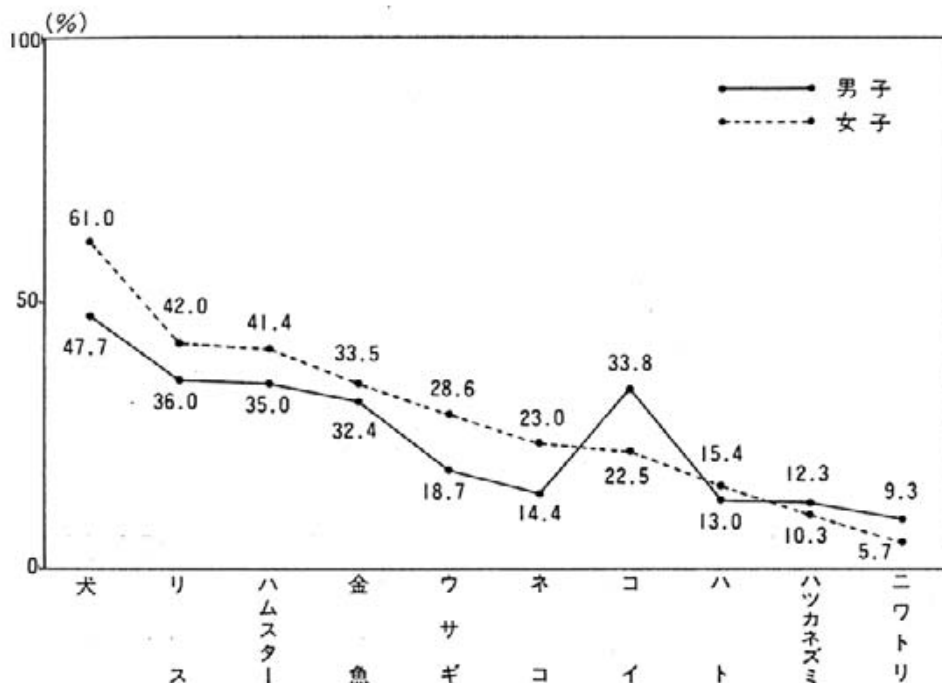
注)「駄目と言われて飼えなかった」割合

図13・どのくらい飼ってみたいか



注) あまり・絶対飼いたくない  
 世話を手伝ってくれるなら飼いたい  
 自分1人で全部世話をしても飼いたい

図14・どのくらい飼ってみたいか×性別



注)「自分1人で全部世話をしても飼いたい」割合

## 家の人びととペット

これまで使用してきたペットの語の中には、家で飼えるようなあらゆる生きものを含んできたのだが、もっと狭い意味でのペットに限って、子どもに直接「好き嫌い」を尋ねて見たのが図15である。犬・ネコ・金魚・小鳥など、いちばん身近で手に入りやすいペットたちに、子どもたちはどのくらい好意を持っているのだろう。そしてまた、父親や母親はどうなのか。4種類のペットの中では、ネコが、男子にも女子にも、父親にも母親にもいちばん嫌われており、逆に小鳥を嫌う子どもは少ないことがわかる。また子どもと両親では、子どもの方が、どのペットも好きだと答える割合が高く、父親と母親では、どういうわけか母親の方が、ペットを好きでない者が多い。この

ことをまとめたのが図16である。

また図17・図18は、両親と子どものペットに対する態度を見たものである。図は、父親と母親のペットに対する態度と、子どもの中で「とても好き」と答えた子どもの割合を示している。図が示すように、犬にせよネコにせよ、父親、母親が犬(ネコ)を好きだと、子どもの犬(ネコ)好きの割合はいちばん高く、親の態度に比例して、子どもの犬(ネコ)好きの割合も順に低下していく。例えば、父親がとてもネコ好きだと、ネコをととても好きな子どもは71%。ところが父親がひどくネコ嫌いだと、その数字は18%にまで下がってしまう。動物に対する態度は、家庭環境が作ることを示すデータとも言えそうである。

とすれば子どもたちが、動物好きだと自分を評価しながら今ひとつその飼育に熱を示さず、したがって飼育に体験を持っていないの

は、裏を返せばおとなたちが、そうしたペットに対する愛情や関心を必ずしも十分に持っていないことを示すのかもしれない。

図15・生きものの好き嫌い

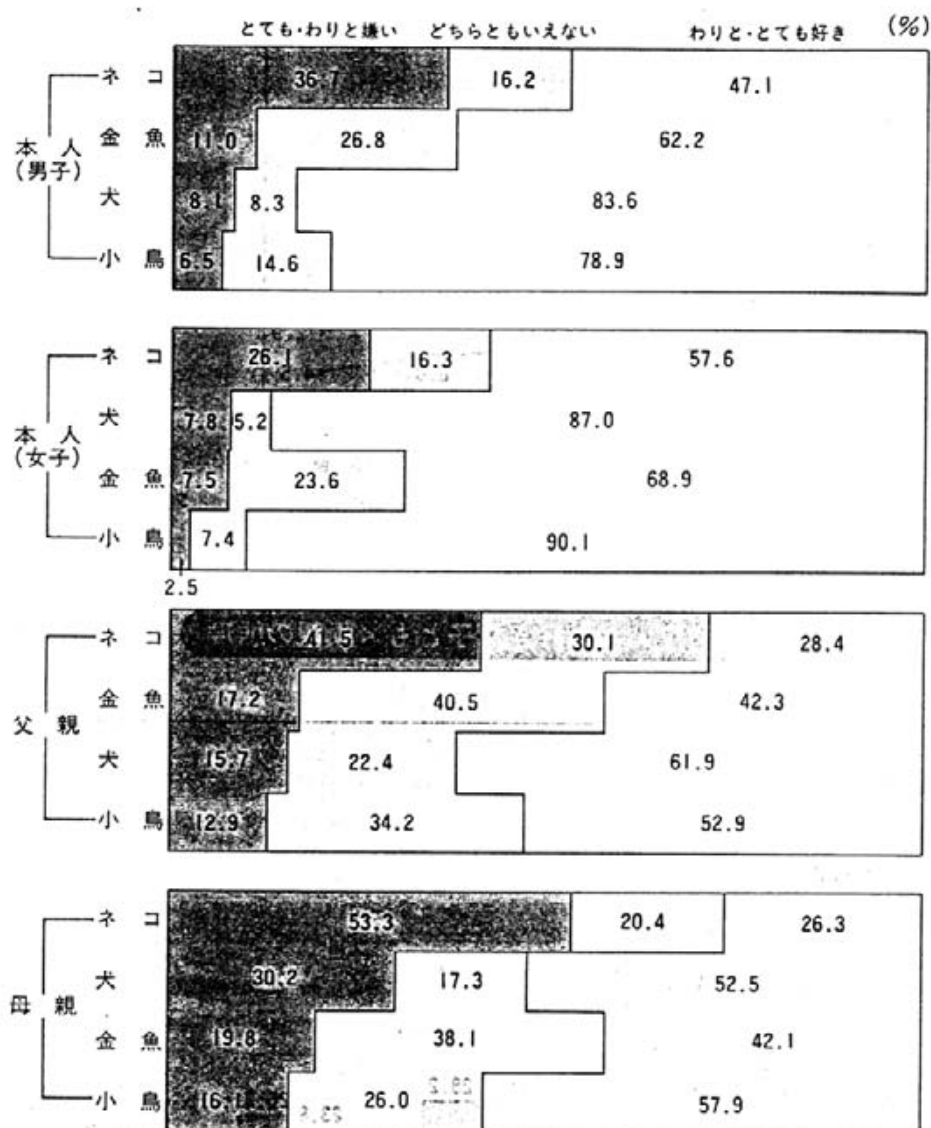
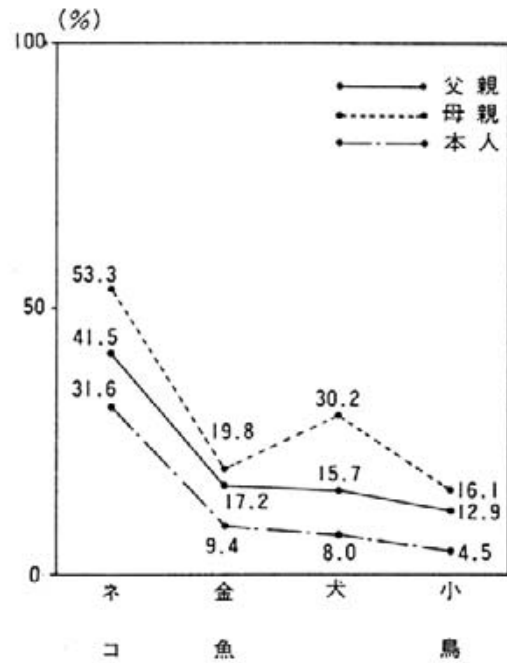


図16・生きものがどのくらい嫌いか



注)「とても」「わりと」嫌いの割合

図17・ネコ好きな子ども×両親の態度

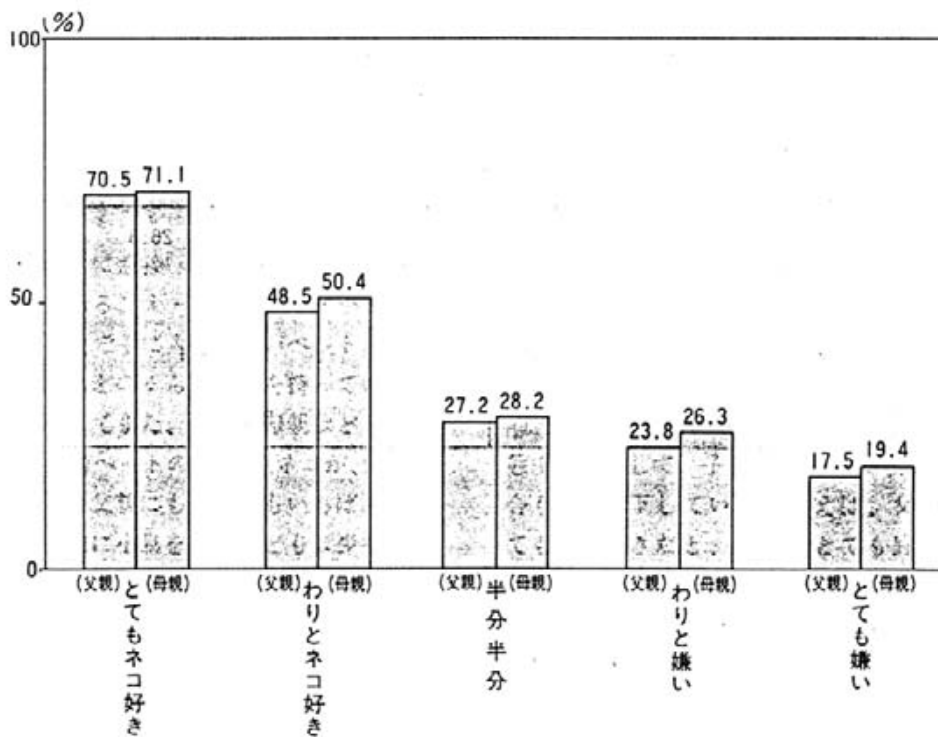
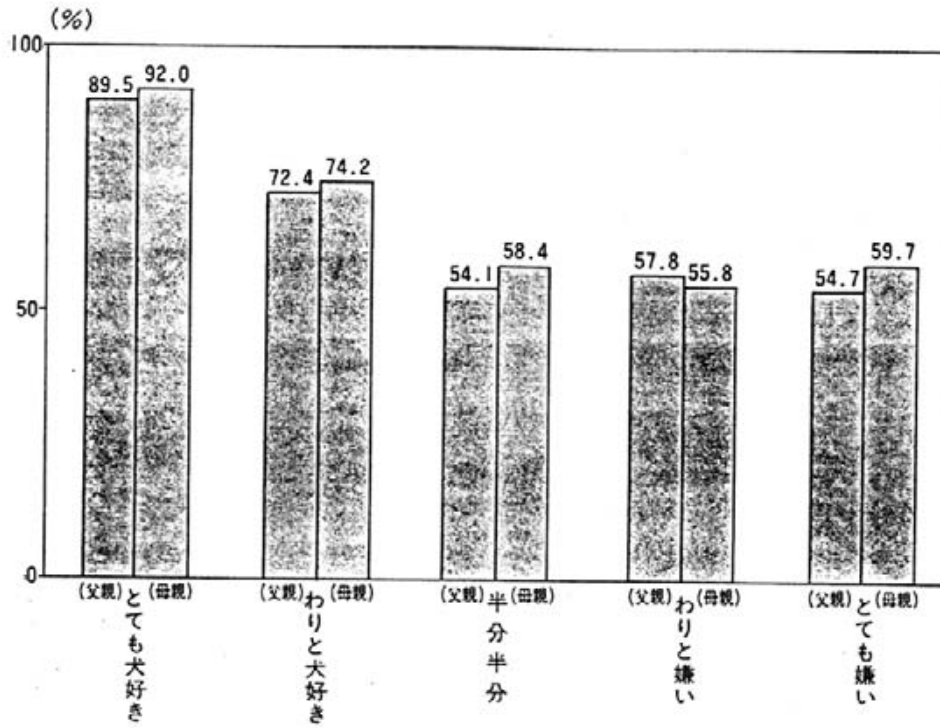


図18・犬好きな子ども×両親の態度



### 3. 友だちとしてのペット



#### 野山へ捕りに出かけた経験

先に見たように、ペットの飼育という意味では、ペットと暮らした日々を、少ししか持っていない子どもたちではあるが、ではペットを求めて野山へ出かけた体験はどのようなだろう。図19はこの点を見たものである。

図が示すのは全体として、野山や川へ生きものを捕りに行った経験の少ない子どもたちの姿である。

子どもにとってはいちばんのおなじみであるはずの、トンボやセミですら、「あまり」「ぜんぜん」捕りに行ったことがないと答える子どもは、4割にも達する。特に体験を持たないのは水辺の生きものとの接触で、ドジョ

ウ・ヤドカリ・タニシ・カエルなどの生きものは、それぞれ76%から90%までの子どもが、ほとんど捕りに行った経験を持たないと答えている。子どもたちの暮らしの中で、自然がいかにか遠く手のとどかないものになってしまっているかが、実感されるデータである。

また図20は性別との関連だが、先のデータと同じように、ここでもあらゆるペットについて、男子より女子にその経験が少ない。中でも比較的差の少ないのは、トンボ・チョウ・コオロギ・オタマジャクシ・ホタル・メダカ・タニシなど、捕るのにやさしいものばかり。そう言えば、昔もこうした種類の虫について

は、男の子たちから、女の子やチビたちの捕るもの、れっきとした男の子は捕るものでない。とする暗黙の理解があったらしいが、それが今も生きている感じであろう。すでに見

たように、虫と親しむ体験から男の子たちは虫を恐れず、また捕るのに難しい種類を選んで、そのゲームを楽しむ、といった態度があるのかもしれない。

図19・生きものを捕りに行った経験

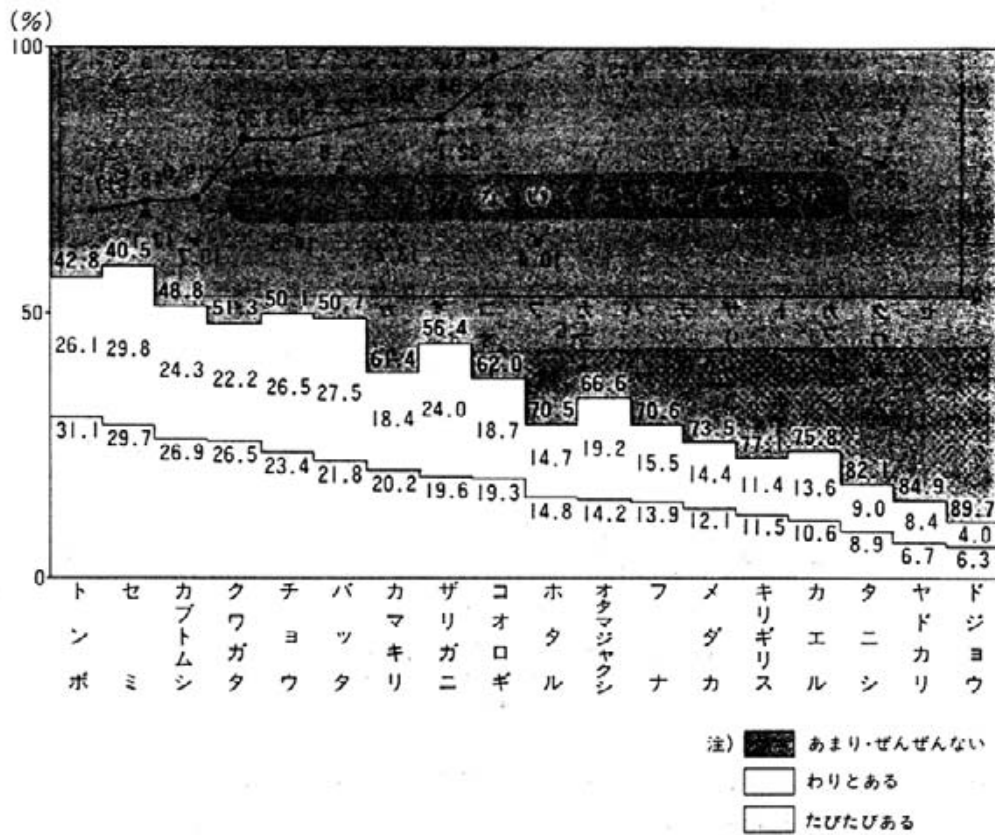
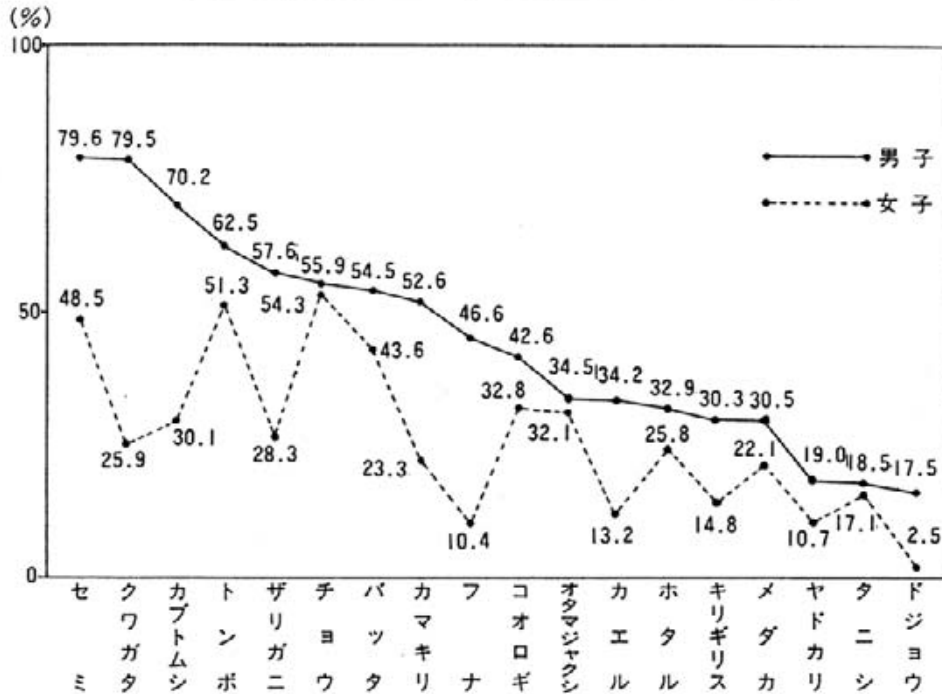


図20・生きものを捕りに行った経験×性別



注) 「たびたび」「わりと」ある割合

## 生態を見た経験

最近、特に都市の子どもたちがペットを手に入れるのは、デパートやペットショップやお祭りの屋台で売られている時であろう。ペットといえば、おりやかごに入って、自然から隔離された姿しか、見たことがなくなっているのではないかと。しかしペットたちも、本来は野や山や川にいて、そこへ遊びに来た子どもたちの目を楽しませ、追いつ追われつのゲームを展開する、という姿が、彼らにとっていちばんの幸せではないだろうか。むろん子どもたちにとっても、友だちとしてのペットは、本来そうしたものであったのである。

さて、こうした虫たちについて、その自然の生態を見たことがあるかを尋ねたのが、図

21である。14種類の虫や鳥などを、「野山や田んぼにいたのを見たことがある」「図鑑やテレビでは見たことがある」「名前だけは知っている」「聞いたこともない」に分けて尋ねてみた。これらはやや自然の中に深く入って行かないと、庭先ではほとんど見られない種類のものばかりである。しかしこれらは、例え一度でもその経験があれば、「見たことがある」に入るのだから、人生を10年もやっていれば、どこかで出会っていても不思議ではない。たぶん、昔の子どもたちなら、ほぼ100%「ある」と答えた経験を持っていたのではないだろうか。

第1位のアメンボウから始まって、セミの



ぬけがら・ツバメ・アブラゼミなど、おとなにとってはなつかしい名前が並んでいる。第9位のヤゴまでは、「見たことがある」子どもたちが65%を超えている。しかしその次のアリジゴクから、見た子どもの割合は50%を割り、アオダイショウは30%、ヒグラシは28%、ヒバリ25%、クサカゲロウ18%と数字は減少する。それと共に「図鑑やテレビでなら見たことがある」「名前だけ」が増えていく。特に「名前を聞いたことすらない」子どもが、アオダイショウで20%、ヒグラシで37%、ク

サカゲロウで44%にもものぼる。またしても、自然は遠くなりけり、の感がする。

また図22は性別との関連で、ここでも女子に大きな体験の低下がある。戦前のように、女子が「女らしく」とするしつけの中でその活動を大きく抑制されていた時代と違って、現代のように、少なくとも子ども時代は、ほとんど行動上の制約が両性の間でとりはずされたかのように思える現代にあって、どうしてこうも図が出てくるたびに、性差が見い出されるのか不思議でならない。

図21・生きものをどのくらい知っているか

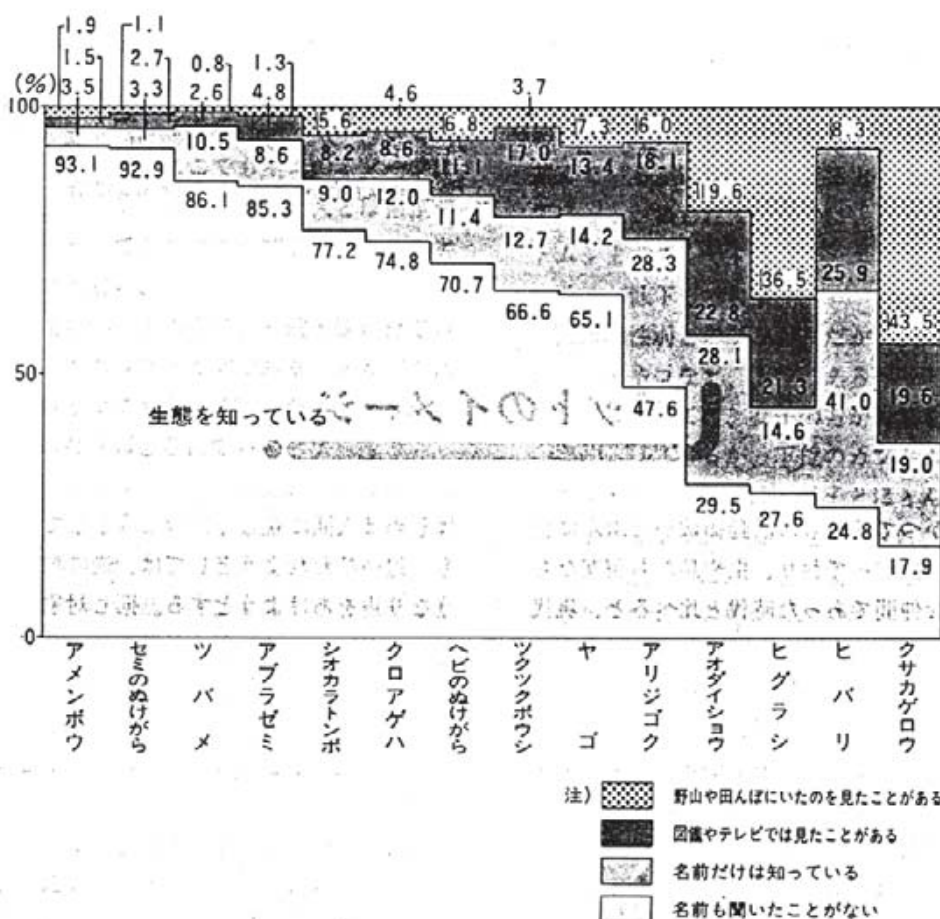
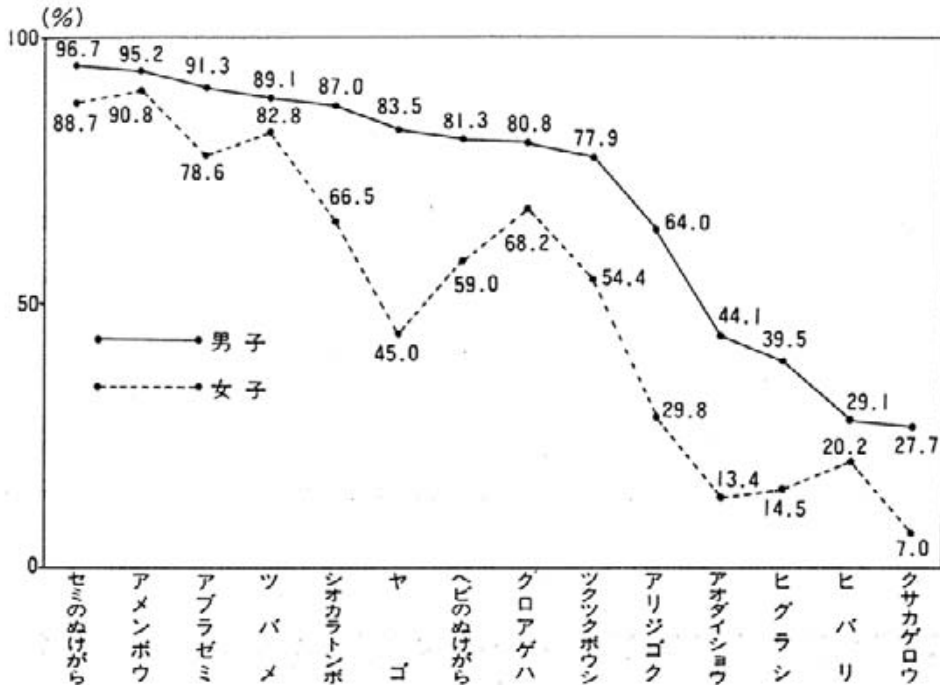


図22・生きものをどれくらい知っているか×性別



注)「野山や田んぼにいたのを見たことがある」割合

## ペットのイメージ

さてかつて子どもの活動領域がたふんに自然の中に拡がっており、虫や鳥たちが友だちで大切な仲間であった時代と比べると、現代の子どもたちの中にあるペットのイメージは、なんらかの点で変化してきていることも、考えられる。親しく身近で、心の通い合う仲間としてのペットのイメージから、怖くて気味が悪く心を持たない、自分とは違った世界の異物としてのペットのイメージへの変化である。例えば、同じ一匹の犬に出会っても、犬好きの人間は、すぐ近寄って手を差し伸べ、体をさすってやる。犬もこれに応じて尾をふり、手をなめるが、犬嫌いの人間は、見ただけで顔色を変え、シッと追い払おうとする。

はじめは人間に親しく近づこうとしていた犬も、追い払われようとしては、逆に敵対し、うなり声をあげようとする。同じ対象を、親しい友人にすることも、おそろしい敵にすることも、人間の心ひとつにかかっているのである。

さて現代の子どもにとってのペットとは、何だろう。

図23は、ペットのイメージを「かわいい・頭が良い・人に慣れる・いろいろな芸をしこめる」のポジティブな評価と「臭い・気持ちは悪い・すぐかみついたりさしたりする・すぐ死んでしまう(弱い)」のネガティブな評価の側面に分けて、8種類のペットを評価させ

てみたものである。図は見やすさを考えて、ネガティブな側面(カッコで示した4個)は否定の数値をとってあるので、いずれも円の外側にプロットされているほど、ペットに好意的であるようになっていく。図の数字は「とても」「わりと」そう思うを合わせた割合である。したがって、円の内側にある多角形の面積が大きいほど、ペットに好意的であると見てよいだろう。

図が示すように、いちばん好意的な評価(面積が大)なのは犬であり、次いでハト、その次に、ネコ・トンボ・カブトムシなどが位置している。先に見たように、子どもがいちばんほしがるのが犬であることや、また友だちのいない、ある意味で問題の少年がハトを飼いたがると言われるのは、この2つが、子どもたちから、断然トップに、仲間感情を抱かれているためなのであろう。

同じペットでもネコの評価が低いのは、先に見た通りだが、ここでもネコのイメージは、同じような動物でありながら、犬とは格差があり、かえってトンボやカブトムシよりも劣勢なのは面白い。

その他のペットの中で、一段と嫌われているのは、カエルとトカゲである。トカゲを嫌うのはおとなにも理解されるが、カエルがトカゲと似た評価をされているのは、やや不思議な感じもする。トカゲは童話の主人公にはまず出てこないが、カエルはしばしば登場する生きものだからである。それだけカエルが、子どもたちの周辺にいなくなってしまったということなのか。

さて図24は、「飼っていたペットが死んで悲しい思いをしたことがあるか」を尋ねてみたものだが、予想外に、その経験が少ないようである。すでに見てきたように、ペットを飼った経験が少なく、飼っても自分で世話をすることの少ない子どもたちだから、感情移入もなく、こうした数字になってしまったのだろう。親しい者たちの死、人生の別れを体験することの少なくなってきたことを指摘される、現代の子どもたちの生活だが、その一端が、ここにも表れているとみてよいだろう。

そのことと関連させて、図25は、「もし飼っていた生きものが死んだら、お墓を作ってあげるか」と尋ねた結果である。もしペットに友だちとしての感情移入があれば、答えは「お墓を作ってやりたい」となるだろう。

図が示すようにさすがに犬では91%、次いでジュウシマツの82%、3位にわりと評判の悪いネコが75%と、いずれもかなりの高率で並んでいる。図の数字を見ると、友だちとしてペットが扱われているのは、第4位のカブトムシまでで、ヤドカリやカエルはぐっとその数字が低下してしまう。

図26は性別とのかかわりだが、犬・ジュウシマツ・ネコなど、上位にあるペットらしいペットについては、女子の方がお墓を作りたい、と言っているが、下位のカブトムシ・ヤドカリ・カエル等では、男子とほとんど差がなくなってくる。すでに見たように、女の子たちの共感能力には一定の幅があって、虫を中心とした気味の悪いもの、怖いものには、感情移入ができない傾向が見られる。



図23・ペットのイメージ①

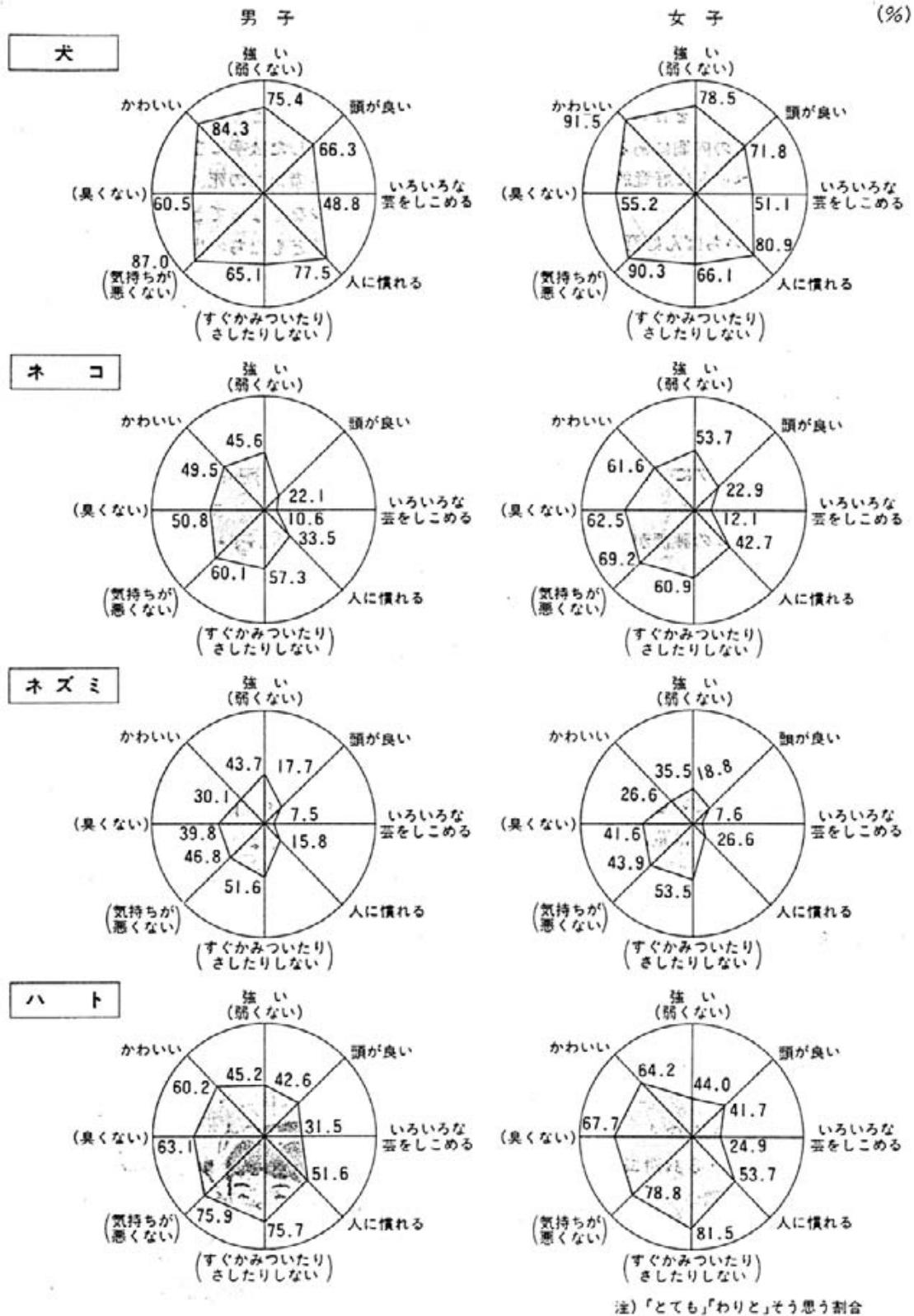


図23・ペットのイメージ②

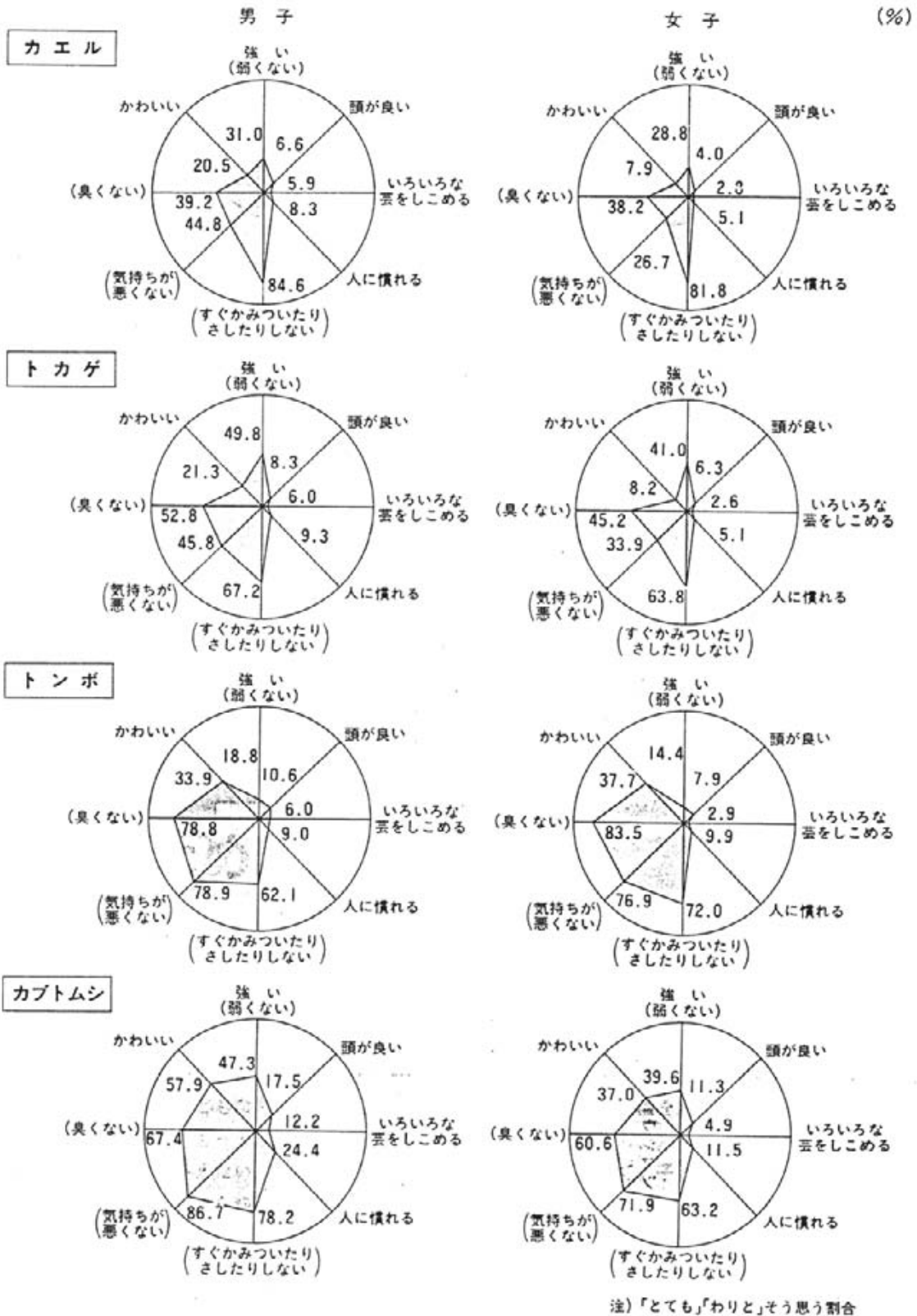


図24・ペットが死んだ時の悲しい体験

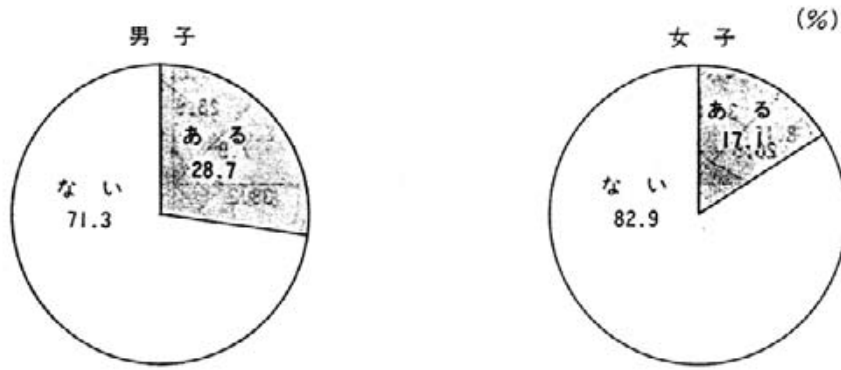


図25・お墓を作るか

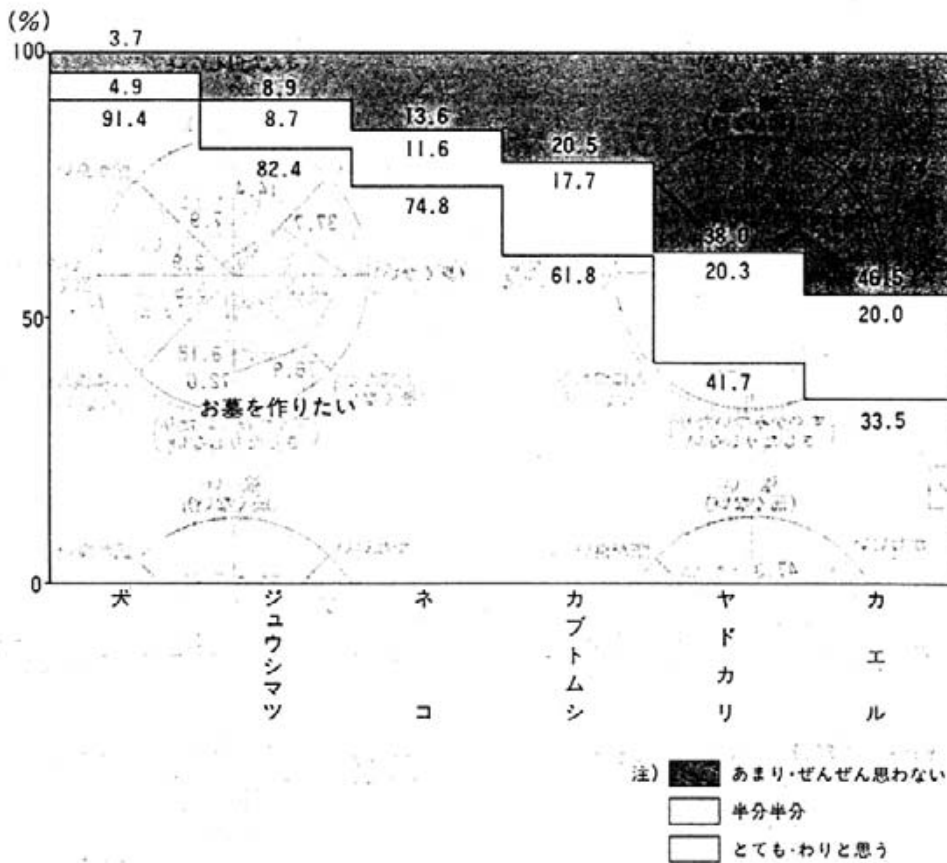
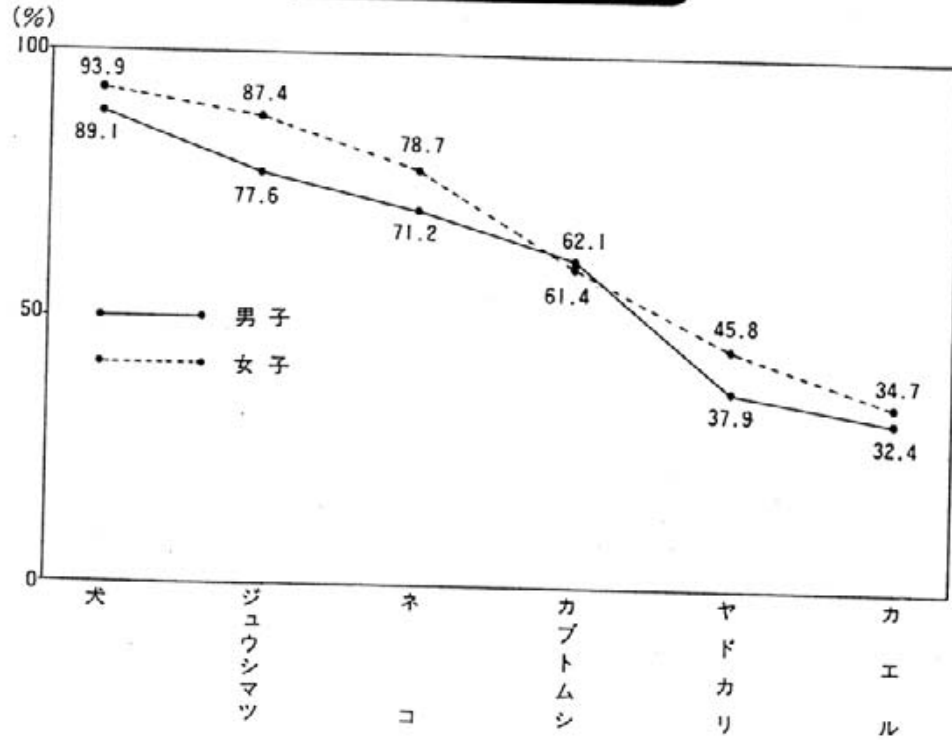


図26・お墓を作るか×性別



注)「とても」「わりと」思う割合

\* \* \*

## まとめに代えて

以上ペットをめぐる子どもたちの反応を種々の側面から見てきたわけだが、調査を終わってみると、昔に比べて、こうした小さな生きものたちとも接触の機会を奪われつつある現代の子どもたちの姿が、心に残る。子どもたちに、もっと豊かな友だちとの付き合いの世界を与えたい。それは人間に限らず、この世界にあるあらゆる生きものとの豊かな接触の機会である。すべての生きものを友と

しながら、子どもの心の世界が、大きく豊かに広がっていくことを望みたい。そのためには身のまわりに、小さな自然のある環境をとり戻させ、休日や長期の休みを利用して、自然の中での生活を計画してやることだろう。また家庭でも、飼っているペットの世話をさせるなどして、子どもたちに生きものを愛し、仲間としての生きものを愛する心を育ててやりたいものである。